

# 令和4年度第4回紀南地域高等学校活性化推進協議会

## 配 付 資 料

- 令和4年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿・・・・・・・・ P 1
- 【資料1】令和4年度第3回  
紀南地域高等学校活性化推進協議会の概要・・・・・・・・ P 2
- 【資料2】紀南地域の高校がめざすべき教育や役割について・・・・・・・・ P 4
- 【資料3】令和7年度に想定される5学級規模の高等学校の  
学びについて・・・・・・・・ P 5
- 【資料4】通学に関する状況について・・・・・・・・ P 11
- 【資料5】紀南地域の県立高校に関するアンケート結果・・・・・・・・ P 13
- 【参考資料1】東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）・・ P 16
- 【参考資料2】熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数（予測）と  
木本・紀南両高等学校への入学者数・・・・・・・・ P 17

【別冊資料】令和4年度紀南地域の県立高校に関するアンケート結果

## 令和4年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿

No		所属及び名前
1	学識経験者	三重大学教育学部 教授 平山 大輔
2	地域有識者	熊野商工会議所 青年部幹事 森本 健一
3		文恵丸水産 代表 長山 行文
4		紀宝町商工会 会長 田尾 友児
5	市町教育委員会	熊野市教育委員会 教育長 倉本 勝也
6		御浜町教育委員会 教育長 辻本 誠一
7		紀宝町教育委員会 教育長 西 章
8	小中学校PTA代表	紀南PTA連合会 会長 野地本 隆
9		紀南PTA連合会 進路研究委員長 倉本 崇弘
10	高等学校PTA代表	県立木本高等学校PTA 会長 道前 涼太
11		県立紀南高等学校PTA 会長 中嶋 悦雄
12	同窓会・地域代表	県立木本高等学校同窓会 会長 森岡 忠雄
13		県立紀南高等学校学校運営協議会 会長 廣畑 勝也
14	小中学校長代表	熊野市立木本小学校 校長 川崎 奈保美
15		御浜町立尾呂志学園中学校 校長 高田 有治
16	小中学校教員代表	熊野市立金山小学校 教諭 久保 範顕
17		御浜町立御浜中学校 教諭 大崎 重久
18	県立高等学校長	県立木本高等学校 校長 松本 徳一
19		県立紀南高等学校 校長 堀越 英範
20	県立高等学校教員代表	県立木本高等学校 教諭 寺前 淑湖

## 令和 4 年度第 3 回紀南地域高等学校活性化推進協議会の概要

1 日 時 令和 4 年 8 月 3 1 日（水）19 時 00 分から 21 時 20 分まで

2 場 所 熊野市文化交流センター

## 3 概 要

15 年先の紀南地域の高等学校の総学級数が 3 学級規模になることをみすえ、地域の高校がめざすべき教育や役割をふまえながら、前回に引き続いて令和 7 年度に総学級数が 5 学級規模になる際に想定される学びと配置のあり方について協議を進めました。また、今後協議を進めていくうえで、地域の中学生や保護者の声を参考とするためアンケート調査を行うこととし、実施時期や対象者、内容等について協議しました。

主な意見は次のとおりです。

## 《 5 学級規模を 3 学級と 2 学級にわけて独立した高校として配置する場合について 》

- この地域の子どもたちの多くは、小学校から続けている競技を高校でも続けたいと希望しているが、5 学級規模を 3 学級と 2 学級にわけて配置すると、地域の高校での部活動は活動しにくくなってしまう。
- 5 学級規模で 2 校舎を配置する場合は、どちらかの学校をなるべく大きくしたほうが、子どもたちの学びは活性化すると思う。学校の小規模化が進む中、5 学級を 3 学級と 2 学級にわけると、今後の中学生の減少に対応することが難しくなるだけでなく、小規模な 2 校の高校ができることで、子どもたちの多様な学びを保証することも難しくなってしまう。
- 他の地域では高校への通学のしやすさを重視する傾向にあるようだが、通学のしやすさよりも学びの選択肢を確保するほうが生徒のためには大切である。近くの学校を残すために 3 学級と 2 学級にわけるとは反対である。
- 3 学級と 2 学級の学校で、それぞれが独立して学ぶ教育環境には不安はあるものの、生徒の多様なニーズがある中、現在 2 校がもつそれぞれの校風があり、子どもたちは自分に合う学校選択ができるというメリットがある。
- 3 学級と 2 学級のそれぞれの学校において、独立して学ぶのではなく、校舎制として連携していく方法も検討してはどうか。紀南地域の高校が統合して 1 校地での 1 校となった時、熊野市までの交通費より、和歌山県への交通費のほうが安くなる地域もあるため、和歌山県の高校が選択肢に入ってくる可能性がある。
- 学級数の減少とともに教員数も減少するため、学びの質の保証という観点では厳しいことではあるが、高校入学時に学校や校舎を選択できることが大切である。生徒は自分自身で選択することで大きく成長するし、また人間関係をリセットすることもできる。
- 学校を二つに分けると、学校を選ぶ選択肢はできても、双方が小規模校化するため、それぞれの学校内での学びの選択肢が限られてくるのではないかと。

## 《 この地域の高等学校の学科のあり方について 》

- 現在普通科 2 学級である紀南高校の学科を新しく改編して、全国に誇れる魅力ある学

科が作れないだろうか。普通科にコース制を導入して、生徒の要望に応えられる教育を行っているが、より全国に発信できるような学びを考えなければ、生徒数の減に伴って学級数が減ると、生徒の地域外への流出も高まってしまう。

⇒（事務局）紀南地域の高校がめざすべき教育や役割について、全国に誇れる魅力ある教育活動とは、この地域に住む約 250 人の子どもたちのニーズにあった学びを充実させることであり、そのような学校をめざす視点が大切である。

○ 木本高校は全国で最初に設置された総合学科のひとつであり、以前は多くの系列があって、調理実習室や被服室、プレゼンテーションルームなど施設・設備が残っている。

○ 紀南高校生の進路は専門学校への進学と地元への就職が、木本高校生の進路は大学進学がそれぞれ多いため、2校の特色を生かして、木本高校は普通科で進学に特化し、紀南高校は総合学科として就職等に対応するように、それぞれの校舎で学びを分けるような学科の配置にできないか。

⇒（事務局）紀南高校での総合学科の開設は、施設・設備の面を考えると現状では難しい。ただし、生徒のニーズにあわせて普通科に選択コースを設置したり、特色ある学校設定科目を開設したりすることが考えられる。

○ 今後も中学校卒業者の数が増減していく状況において、2つの校舎で学びを分けて行う場合は、子どもたちの選択肢を十分満たすための望ましい配置のあり方はどのようなものか、慎重に検討することが必要となる。

#### 《地域の高校を統合するうえで、今後検討が必要な課題について》

○ 1つの高校として校舎制とした場合、部活動時の生徒移動については、JRや路線バス等の公共交通機関では交通費の保護者負担が大きいというえに時間もかかり、現実的ではないため、専用のバスを用意してもらえるような対策はないのか。

○ 分校化せずに1校地に統合する場合には、通学費用の負担を心配する保護者もいる。通学費用がどのくらいかかっているのかを明らかにしながら議論を進めたい。また、この地域のバスの便数が少ないことも考慮すべきである。

#### 《地域の中学生・保護者を対象としたアンケート調査について》

○ アンケート調査では、中学生や保護者の切実な思いが託されることも考えられるので、その集計結果については、協議会としてもしっかりと受け止める必要がある。

○ アンケートの集計結果は、紀南地域全体だけでなく、市町ごとに集計した結果もわかるようにしてもらいたい。また、中学生については、高校を選ぶときに重視することや、どのような学習をしたいか等、学びの選択肢についての意見もきちんと聞きたい。

○ 保護者への説明資料には現在の「県立高等学校活性化計画」についての説明や、当協議会ではどのような協議がなされているのかを、わかりやすく示して保護者の理解を深めたい。このアンケートに答えてもらうようにしてもらいたい。

○ 5学級規模の学校を3学級と2学級の2つの学校とした場合について、それぞれ独立した学校という選択肢だけでなく、統合したうえで3学級と2学級の校舎で学ぶという選択肢を追加してほしい。

## 紀南地域の高校がめざすべき教育や役割について

### 紀南地域の高等学校がめざすべき教育や役割に係る当協議会での意見

- ・ 学びの選択肢が充実し、生徒が自ら学びたいと思える学校
- ・ 生徒の進路実現に向け、大学進学や地元への就職にも対応できる学校
- ・ 様々な団体と連携する活動が充実し、全国に誇れる魅力ある教育活動を行う学校
  - （ 地域の産業や企業と連携した学び  
小中学校、大学等の地域の教育機関と連携した学び 等 ）
- ・ 様々な支援が必要な生徒をはじめ、一人ひとりへの丁寧な指導により自己肯定感を高める学校
- ・ ICT を活用して地域外ともつながる学習活動が充実している学校
- ・ 学校行事や部活動が活発化している学校
- ・ 集団の中で多様な考えや価値観に触れながら、豊かな社会性、人間性を育む学校

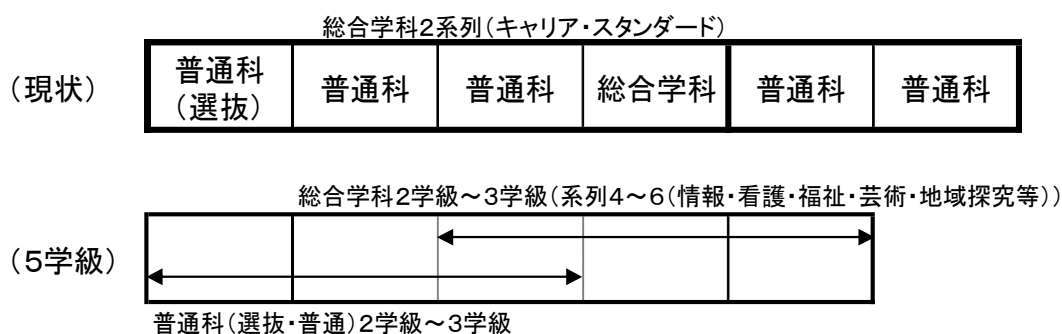
## 令和7年度に想定される5学級規模の高等学校の学びについて

### 想定 A 2校が統合して1つの校地で学ぶ（1校5学級規模）

【4学級から5学級へ1学級増となる際の状況変化を中心に記述】

#### ○想定される学習活動

- ・ 教員数が増えることから、理科（物理、化学、生物、地学）や地理歴史（日本史、世界史、地理）、芸術（音楽、美術、書道）などについて、これまでより多くの科目で専門性の高い教員を配置できる可能性が高まる。
- ・ 多様な科目の講座開設が可能となるなど、難関大学から専門学校までの進学や就職などの生徒の幅広い進路希望に応える教育活動がより充実する。
- ・ 将来の進路に関わって同じ興味・関心や目標を持つ者同士が一定数集まって学び合うなどの教育活動が充実する。さらに ICT を活用して他校とつながることでより効果的な学習に発展することが期待できる（R4～ 他校の夏期課外をオンラインで受講）。
- ・ 総合学科で学級増を行えば、現在の1学級2系列を2～3学級4～6系列にすることが可能となり、生徒のニーズの高い看護・福祉系、芸術系だけでなく、紀南高校で培ってきた地域を学び場とした学習を系列として設けることもできる。こうした地域を学び場とした学習は生徒が1校に集まることから、より広域かつ多様なテーマで学習を進めていくことも可能となる。



#### ○想定される学校行事や部活動

- ・ 生徒数が増えることから、文化祭では学級や部活動の発表数が増え、体育祭では種目数や競い合う機会が増えるなど、学校行事をこれまでより活性化させることができる。
- ・ 部活動については、生徒数が増えることにより、団体競技における大会への参加の可能性が広がることや、多様な部活動の設定がある程度可能となる。また、既存の部活動についても、部員数の増加が見込まれ、活動がより活発となる。

#### ○想定される生徒の状況等

- ・ 生徒や教職員の人数が増え、生徒は学校生活全般を通じて多様な価値観に触れ、切磋琢磨しながら協働的に学ぶ機会が増すことから、社会性・人間性の育成が一層期待できる。

- ・紀南地域の中学校卒業者の8割を超える生徒が同じ高校で学ぶことから、地域全体の子どもたちのつながりの一層の広がりが期待できる。
- ・一方、地域の中学生が1つの高校で学ぶことになるため、入試時や入学後も目的意識を持ちながら学習できるよう、5学級規模のうち総合学科を2～3学級にしたり、普通科にコースを設置したりすることで、校内に学びの選択肢を作るなどの工夫が必要である。
- ・今後も続く地域の中学校卒業者の増減に柔軟に対応することができる。

## <第2回協議会（7/14）の意見等>

### ○学びについて

- ・生徒の興味・関心に応じた学習を選択できることが見込まれる
- ・より大きな学級規模となり、生徒の学習環境や授業内容が充実することが見込まれる

### ○部活動について

- ・地域からのニーズが高い部活動の維持につながり、社会性・人間性の育成に大きな効果が期待できる
- ・部活動の充実を求めて地域外へ進学する生徒もいるため、1校に統合して部活動を活発化し、ニーズに応えることが期待できる

### ○生徒の状況について

- ・大きな集団にすることでクラス替えもできることから、生徒は自分の居場所をつくることが期待できる
- ・紀南地域の中学校卒業者の8割を超える生徒が高校時代を一緒に過ごすことで、この地域の多様な価値観を持つ同年代の仲間とのつながりが広域で形成されることが期待される

### ○想定Aにおいて工夫すべき事項や課題

（学びについて）

- ・生徒一人ひとりに応じた丁寧な指導や支援を継続させていく工夫が必要
- ・地域の担い手を育む教育を進めるための工夫が必要
- ・学校の選択肢がなくなることで、生徒の学習に対するモチベーションが下がらないようにする工夫が必要

（通学について）

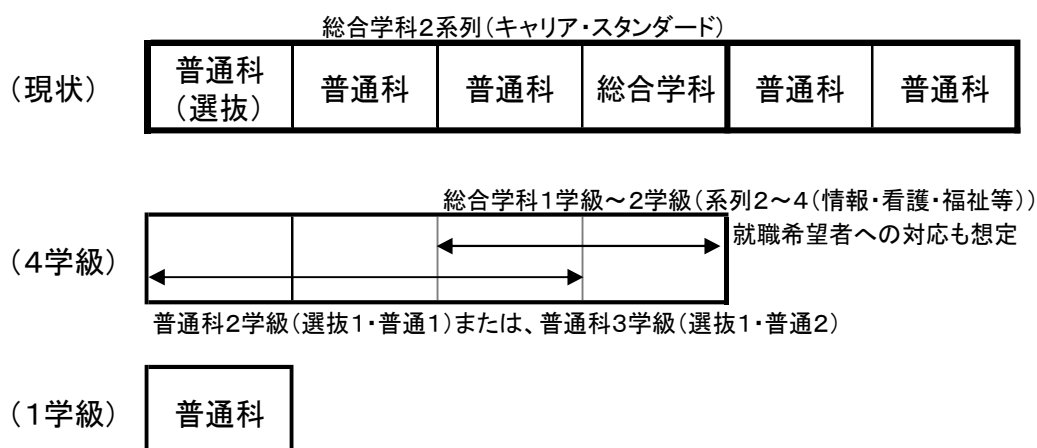
- ・現在より通学に時間のかかる生徒への支援の検討が必要

## 想定B 2校が連携して2つの校地で学ぶ（4学級＋1学級）

【2学級から1学級となる際の状況変化を中心に記述】

### ○想定される学習活動

- ・1学級の学校では、生徒数・教員数は少なくなるものの、引き続き学び直し等の丁寧な指導や地域を学び場とした学習を行うことができる。
- ・教員配置は一般的に約8人となることから、単位数の小さい科目における常勤の教員の配置や生徒のニーズに応じた選択科目の開設は難しくなる。
- ・専門性の高い非常勤講師の確保が難しい当地域では、分校化して同じ学校の教員が学校間を行き来した授業や、ICTを活用した遠隔授業の実施など4学級規模の高校との連携や、地域を学び場とした学習等においてより地域と連携した活動を推進するなど様々な工夫が必要と考えられる。
- ・体育の授業は、1学級を男女別に分け、1講座の生徒数が20人を下回る状況が生じるため、ソフトボールやサッカーなどの集団競技において工夫が必要となる。



### ○想定される学校行事や部活動

- ・1学級の学校では、文化祭の部活動や学級の発表はこれまでと比べて半分となる。体育祭では生徒の活躍の機会が増える一方、同じ生徒同士が競い合う場面が多くなる。
- ・部活動では、部員数の減少に伴い、特に3年生の引退に伴って単独出場ができなくなることも多くなり、同じ状況の学校と合同チームを編成して大会に出場することが増える。
- ・現在のルールでは、単独出場ができない学校同士が合同チームを編成し大会に出場しているため、分校化することにより同一校として大会に出場することも考えられる。その際、週のうち何日かは、JRやバス等を利用していずれかの学校において練習することとなる。

### ○想定される生徒の状況等

- ・1学級規模ではクラス替えがなく、多様な価値観に触れる機会の減少や、人間関係の固定化が懸念されるため、学校行事、部活動だけでなく、日々の教育活動においても生徒が両校間を移動して共に学ぶ機会を設けるなどの工夫が必要となる。



- ・紀南地域は私立高校がなく公立高校のみで入学定員を設定しているため、2校をあわせると一定数の欠員が生じることとなる。欠員が1学級規模の学校に偏ると、定員の40人を大きく下回る入学者数となることも考えられ、入学者数が安定せず、生徒の学習環境が年度ごとに変化することが懸念される。

## ＜第2回協議会（7/14）の意見等＞

### ○学びについて

- ・生徒一人ひとりに対応した少人数ならではの丁寧な指導が継続できる

### ○生徒の状況について

- ・2校舎が存続することで、生徒の通学環境は変わらない

### ○想定Bにおいて工夫すべき事項や課題

（学びについて）

- ・豊かな社会性・人間性の育成のために、地域と協働した教育活動の推進やICTの活用が必要
- ・学びをより充実するために、校舎制にして、授業では教員が、学校行事や部活動では生徒が、校舎間を移動するなどの検討が必要

（部活動について）

- ・人数が少ないことで活動に制限がかかることへの対応が必要

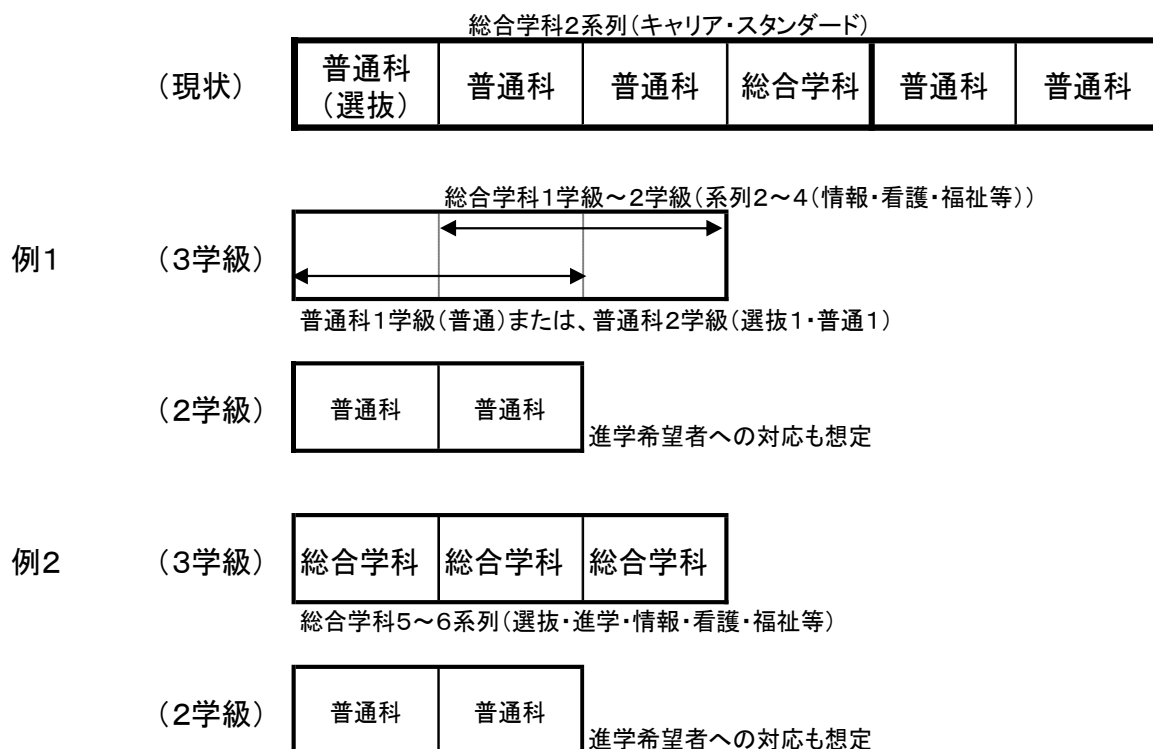
（教育環境の確保について）

- ・1学級規模の学校において大きく欠員を生じたときを想定した、教育環境の確保について検討が必要

**想定C** 2校が独立して学ぶ（1校3学級+1校2学級）  
 【4学級から3学級へ1学級減となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・3学級の学校では、教員数が減ることから、理科や地理歴史、芸術等において、それぞれの科目で専門性の高い教員を配置することが難しくなる。
- ・進学については、大学ごとに面接や小論文を含む受験科目が異なり、問題の難易度や傾向についても様々であるため生徒をグループに分けて指導しているが、教員数が減ることにより、その数を減らすなどして対応することとなる。
- ・選択科目の1講座あたりの受講希望者数も減ることから、学びのニーズに応じた多様な選択科目の開設がこれまでより難しくなる。
- ・地域の学びの選択肢を確保するために、総合学科の学級数を増やすことも考えられるが、普通科1学級・総合学科2学級となり、普通科が現在の3学級から1学級になることで、いくつかの科目では文理別の講座編成が難しくなる可能性がある。
- ・もう一方の2学級の普通科では、引き続き学び直し等の生徒一人ひとりへの丁寧な指導や、これまで取り組んできた地域を学び場とした学習を取り入れながら教育活動を行うこととなる。



## ○想定される学校行事や部活動など

- ・3学級の学校では、これまでより文化祭や体育祭の規模が縮小される。
- ・教員数と生徒数が減少することから、部活動顧問や活動する生徒の確保が難しくなり、これまで設置していた部活動の整理が必要となる。
- ・2校とも学級規模が小さいため、3年生が引退後の新チームにおいて学校単独での大会出場が難しくなる可能性が双方において高くなる。また、状況によっては合同での出場となるが、2校のうち一方のみが単独出場できる場合は、他方は遠方の学校との合同チームとなることも想定される。

## ○想定される生徒の状況等

- ・両校とも小規模校であるため、教員との関係や生徒同士の集団の中で多様な考え方に触れながら行われる協働的な学びの機会の確保のために、両校同士や両校とそれぞれの地域との連携がより必要となる。
- ・小規模校では開設科目や部活動数が限定されるため、大学進学に向けた学びや部活動に励みたい中学生は、地域外の高校へ進学していくことが懸念される。
- ・今後も続く学級増減への対応の方向性が明確になりにくく、さらに両校とも小規模校であるため、1学級の増減が生徒の学びに大きく影響することが懸念される。

### <第3回協議会（8/31）の意見等>

#### ○生徒の状況について

- ・生徒の多様なニーズがある中、それぞれの校風を生かし、生徒は新たな人間関係をつくるなど、自分に合う学校選択ができる

#### ○想定Cにおいて工夫すべき事項や課題

- ・学校を選ぶ選択肢はあるが、両校舎が小規模校化するため、それぞれの学校内での学びの選択肢が限られる。
- ・それぞれの校舎で教員が減少し、子どもたちの多様な学びの保証や部活動の維持も難しくなり、教育環境の確保について検討が必要

#### ※2校が連携する3学級規模の本校と2学級規模の分校とすること

保護者へのアンケート内容を検討する際、2校を3学級規模の本校と2学級規模の分校とし、連携しながら学ぶ方法が提案され、選択肢に入れることとなった。

## 通学に関する状況について

### ○通学費用の現状（県立高校全日制）

#### （1）県内地域別の生徒の通学費用

県立高校に在籍する全生徒の1ヶ月にかかる通学費用については、9,000円以内の生徒が84.9%である。一方、通学費用が15,000円以上の生徒は、地域により差はあるものの、全体では3.1%存在している。

地域別県立高等学校(全日制)への通学必要経費(1カ月あたり:1~3年)

令和4年5月1日現在

学校名・地域名	不要	3,000円以内	5,000円以内	7,000円以内	9,000円以内	11,000円以内	13,000円以内	15,000円以内	15,000円以上	合計(人)
桑名・四日市地域(16校)	4,825 41.7%	610 5.3%	1,908 16.5%	1,177 10.2%	927 8.0%	871 7.5%	509 4.4%	322 2.8%	424 3.7%	11,573
鈴鹿・津地域(14校)	3,915 41.9%	587 6.3%	2,510 26.9%	942 10.1%	524 5.6%	325 3.5%	145 1.6%	151 1.6%	239 2.6%	9,338
松阪地域(6校)	1,358 46.8%	107 3.7%	657 22.6%	245 8.4%	148 5.1%	87 3.0%	175 6.0%	61 2.1%	64 2.2%	2,902
伊勢志摩地域(9校10校舎)	1,536 43.7%	159 4.5%	732 20.8%	468 13.3%	118 3.4%	88 2.5%	232 6.6%	84 2.4%	100 2.8%	3,517
伊賀地域(5校)	1,268 41.6%	183 6.0%	291 9.5%	301 9.9%	201 6.6%	369 12.1%	207 6.8%	92 3.0%	137 4.5%	3,049
東紀州地域(3校)	546 48.6%	68 6.0%	222 19.8%	140 12.5%	73 6.5%	35 3.1%	17 1.5%	12 1.1%	11 1.0%	1,124
合計	13,448 42.7%	1,714 5.4%	6,320 20.1%	3,273 10.4%	1,991 6.3%	1,775 5.6%	1,285 4.1%	722 2.3%	975 3.1%	31,503

#### （2）東紀州地域の生徒の通学費用

東紀州地域の県立高校3校に在籍する全生徒の1ヶ月にかかる通学費用については、9,000円以内の生徒が93.3%である。木本・紀南両校において通学費用が15,000円以上となる生徒8名は、紀北町からの通学者またはバスを利用している通学者である。

東紀州地域県立高等学校(全日制)への通学必要経費(1カ月あたり:1~3年)

令和4年5月1日現在

学校名・地域名	不要	3,000円以内	5,000円以内	7,000円以内	9,000円以内	11,000円以内	13,000円以内	15,000円以内	15,000円以上	合計(人)
尾鷲	258 56.6%	23 5.0%	82 18.0%	38 8.3%	31 6.8%	14 3.1%	5 1.1%	2 0.4%	3 0.7%	456
木本	190 40.3%	27 5.7%	92 19.5%	97 20.6%	38 8.1%	10 2.1%	8 1.7%	9 1.9%	1 0.2%	472
紀南	98 50.0%	18 9.2%	48 24.5%	5 2.6%	4 2.0%	11 5.6%	4 2.0%	1 0.5%	7 3.6%	196
東紀州地域(3校)	546 48.6%	68 6.0%	222 19.8%	140 12.5%	73 6.5%	35 3.1%	17 1.5%	12 1.1%	11 1.0%	1,124

#### （3）両校への通学費用

##### 木本高校の例（1カ月）

JR（熊野市駅まで）

・新鹿駅～3,600円・神志山駅～3,600円・阿田和駅～5,130円・鶯殿駅～7,020円

バス（木本高校まで）

・入鹿中学校前～15,000円・高千良（尾呂志学園最寄）～11,000円

## 紀南高校の例（1カ月）

JR（阿田和駅まで）

- ・新鹿駅～6,910円・熊野市駅～5,130円・有井駅～4,230円・鶉殿駅～4,230円

バス（紀南高校前まで）

- ・入鹿中学校前～10,000円・尾呂志～7,500円

## 【参考】

### ○ 三重県の修学支援制度（いずれも所得制限あり）

#### （1）就学支援金（授業料助成）

- ・県立高校の授業料分の金額（全日制の場合月額9,900円）を支給する制度
- ・支給が認められれば、県立高校での授業料の支払いが不要

※全国の約80%の生徒が利用

#### （2）奨学給付金（返済不要の給付金）

- ・授業料以外の教育費を助成するために、一時金を支給する制度
- ・支給額：32,300～143,700円
- ・対象となる方：保護者等が三重県内に居住。保護者等が生活保護を受給しているか、県民税所得割及び市町村税所得割が非課税の世帯、などの資格をすべて満たす世帯

#### （3）修学奨学金（無利子の貸付金）

- ・高校、高専に進学後に利用できる無利子の貸付金  
進学先を卒業後、原則1～2年間以内に返還
- ・貸付額：国公立校の場合、月額8,000円～23,000円  
入学時一時金：国公立校の場合、月額40,000円又は80,000円
- ・対象者の条件：保護者が三重県内に住所を有している。  
世帯の所得額が一定基準以下（3人以下340万円など） 他

### ○ 各市町の支援（各奨学金については、いずれも所得要件あり）

#### （1）熊野市

##### ・高等学校等通学費補助制度

補助対象者：熊野市内に住所を有し、木本高校、紀南高校、くろしお学園高等部に在籍する者等の条件

補助額：JR及びバスの通学定期券購入費の1/3（通学定期券購入後に個人で申請）

- ・熊野市奨学金（給付） 対象：大学・短大・高専・高校、金額：5,000円/月以内（高校）  
※大学、短大、高専（4、5年生）等を対象とした貸与の奨学金もあり

#### （2）御浜町

- ・須崎奨学金（給付） 対象：高校（年5名以内）、金額：60,000円/年以内
- ・大久保奨学金（給付） 対象：高校（年1名）、金額：60,000円/年以内

#### （3）紀宝町

- ・紀宝町奨学金（給付） 対象：高校・高専（1～3年生）、金額：60,000円/年以内

## 紀南地域の県立高校に関するアンケート結果

## 1 中学生を対象としたアンケート結果

## A 学びについて

(高校を選ぶときに重視すること)

- ・30%を超える生徒が「通学のしやすさ」(31.3%)や、「進学や就職など多様な進路に応じた学習の選択ができること」(30.4%)を重視している。
- ・約25%の生徒が「多くの友だちや先生との出会い」(26.7%)、「学校行事の充実」(24.6%)、「入りたい部活動があること」(23.8%)を重視している。

(高校で学びたい学習)

- ・40%近い生徒が高校で学びたい学習について「わからない、まだ決まっていない」(37.9%)としている。
- ・40%を超える生徒が「国語、社会、理科、英語など中学校で学習する内容を深める学習」(41.3%)を学びたいとしている。

(高校に期待する教育)

- ・約56%の生徒が「自分の将来を選択する力を育てる教育」(56.3%)を期待している。
- ・30%近い生徒が「社会性や協調性、コミュニケーション能力を育てる教育」(29.6%)を期待している。
- ・約25%の生徒が「自ら学び続ける力を育てる教育」(26.3%)、「基本的な知識を身に付ける教育」(24.6%)、「社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育」(23.3%)を期待している。

## B 学級の規模について

- ・選んだ生徒の割合が多い順に「1学級」(27.9%)、「2学級」(27.1%)、「3学級」(26.3%)の学校で学びたいとしている。
- ・続いて、「5学級」(10.8%)、「4学級」(7.9%)の学校で学びたいとしている。
- ・生徒の多くが学びたい学級規模に関係なく、学びたい学級規模を「友だちや先輩、先生など、多くの出会いがあると思うこと」(57.5%)を理由として選んでいる。

## 【中学生の意見】

- ・高校を選ぶとき「進学や就職など多様な進路に応じた学習を選択できること」や「通学のしやすさ」、「多くの友達や先生との出会い」、「入りたい部活動があること」を重視している。
- ・高校では、「5教科などの中学校での学びを深める学習」をしたいと考えている。
- ・高校には、「自分の将来を選択する力」、「社会性や協調性、コミュニケーション能力」、「自ら学び続ける力」などを育む教育を期待している。
- ・「1～3学級」の学校で学びたいと考えており、その理由は学級規模を問わず、「友だちや先輩、先生など、多くの出会いがあると思うこと」としている。

## 2 保護者を対象としたアンケート結果

### A 学びについて

(高校を選ぶときに重視すること)

- ・約 65%の保護者が「進学や就職など多様な進路に応じた学習の選択ができること」(65.1%)を重視している。
- ・約 28%の保護者が「大学進学につながる学力向上を目指した学習ができること」(27.5%)を重視している。

(高校に期待する教育)

- ・約 40%の保護者が「社会性や協調性、コミュニケーション能力を育む教育」(42.4%)、「進路選択の力を育む教育」(41.0%)、「主体的に学び続ける力を育む教育」(38.1%)を期待している。
- ・約 28%の保護者が「社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育」(27.5%)を期待している。

### B 令和7年度の紀南地域の高校のあり方について

- ・約 45%の保護者が「2校を統合した学校で学ぶ(1校5学級)」(44.6%)を選択している。
- ・約 36%の保護者が「統合せずに、それぞれの学校で学ぶ(1校3学級+1校2学級)」(35.9%)を選択している。
- ・約 10%の保護者が「2校を統合して1校を分校とし、2つの校舎で学ぶ(本校3学級+分校2学級)」(9.9%)を、約 4%の保護者が「2校を統合して1校を分校とし、2つの校舎で学ぶ(本校4学級+分校1学級)」(3.6%)を選択している。

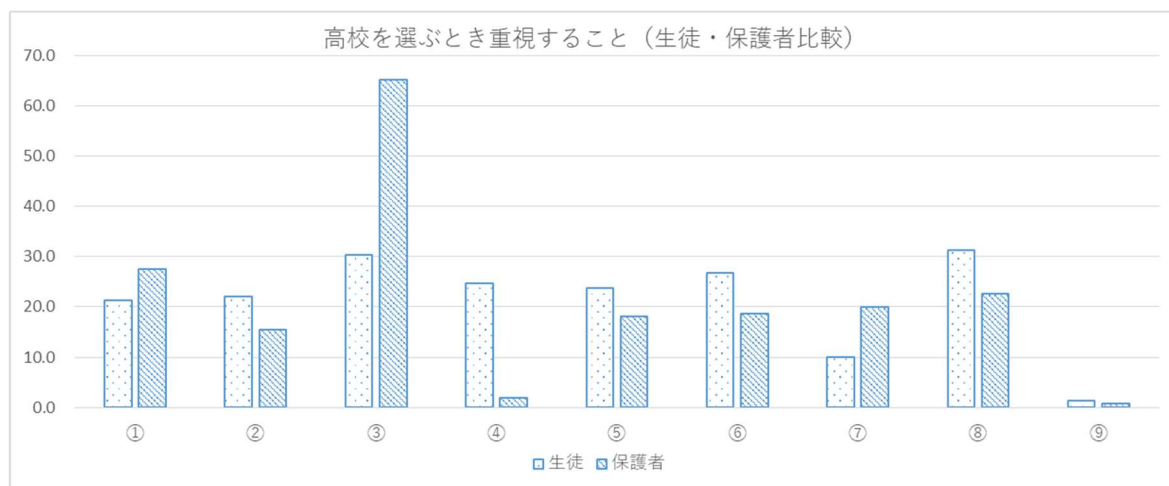
#### 【保護者の意見】

- ・高校を選ぶとき「進学や就職など多様な進路に応じた学習の選択ができること」や「大学進学につながる学力向上を目指した学習ができること」を重視している。
- ・高校には、「社会性や協調性、コミュニケーション能力を育む教育」や、「進路選択の力を育む教育」、「主体的に学び続ける力を育む教育」、「社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育」を期待している。
- ・令和7年度の地域の高校のあり方については、半数近くの保護者が「2校を統合した学校で学ぶ(1校5学級)」を選択する中、3分の1を超える保護者が「統合せずに、それぞれの学校で学ぶ(1校3学級+1校2学級)」を選択している。

### 3 生徒と保護者の回答の比較

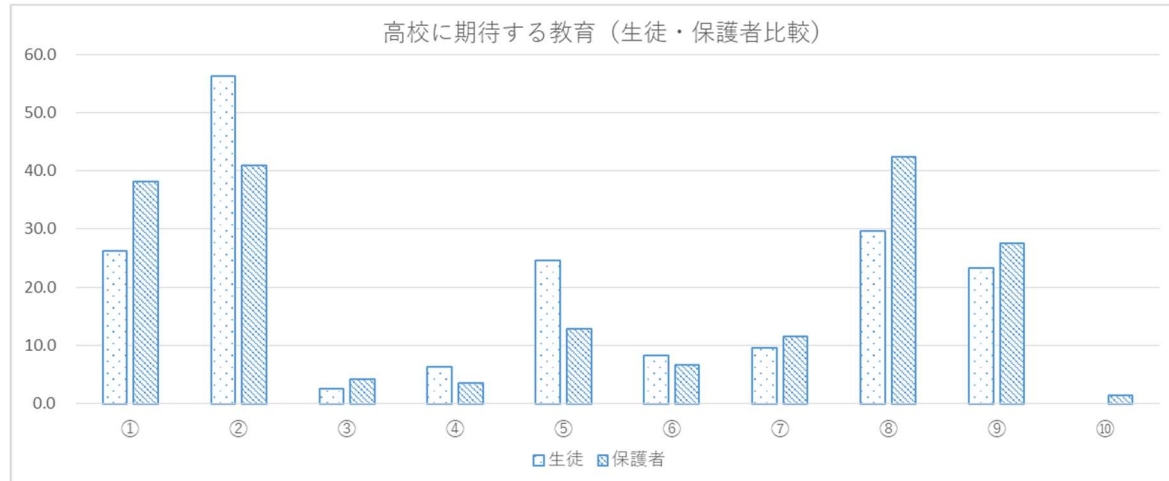
(1) 高校を選ぶとき重視すること (回答は2つ以内、( )は各回答者数に対する割合)

項目	生徒	保護者
①大学進学につながる学力向上を目指した学習ができる	51 (21.3%)	114 (27.5%)
②就職につながる専門的な知識や技能、資格が取得できる	53 (22.1%)	64 (15.4%)
③進学や就職など多様な進路に応じた学習を選択することができる	73 (30.4%)	270 (65.1%)
④文化祭や体育祭などの学校行事が充実している	59 (24.6%)	8 (1.9%)
⑤入りたい部活動がある	57 (23.8%)	75 (18.1%)
⑥多くの友だちや先生と出会うことが期待できる	64 (26.7%)	77 (18.6%)
⑦一人ひとりに目が行き届きやすく、きめ細かな教育が期待できる	24 (10.0%)	83 (20.0%)
⑧通学しやすい	75 (31.3%)	94 (22.7%)
⑨その他	3 (1.3%)	3 (0.7%)



(2) 入学する高校に期待する教育 (回答は2つ以内、( )は各回答者数に対する割合)

項目	生徒	保護者
①自ら学び続ける力を育てる教育	63 (26.3%)	158 (38.1%)
②自分の将来を選択する力を育てる教育	135 (56.3%)	170 (41.0%)
③地域について学ぶ教育	6 (2.5%)	17 (4.1%)
④人権に対する意識を高める教育	15 (6.3%)	15 (3.6%)
⑤基本的な知識を身につける教育	59 (24.6%)	53 (12.8%)
⑥ICTを積極的に活用する教育	20 (8.3%)	28 (6.7%)
⑦広く世界で活躍できる力を育てる教育	23 (9.6%)	48 (11.6%)
⑧社会性や協調性、コミュニケーション能力を育てる教育	71 (29.6%)	176 (42.4%)
⑨社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育	56 (23.3%)	114 (27.5%)
⑩その他	0 (0.0%)	6 (1.4%)





# 東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）

参考資料1 R4第2回協議会資料

令和4年5月1日 教育政策課調べ

	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 卒業	R 5.3 現中3	R 6.3 現中2	R 7.3 現中1	R 8.3 現小6	R 9.3 現小5	R 10.3 現小4	R 11.3 現小3	R 12.3 現小2	R 13.3 現小1
尾鷲市	卒業生数	122	118	130	127	119	107	99	120	87	84	68	87
	前年度対比		-4	12	-3	-2	-12	-8	21	-33	-3	-16	19
	R4.3対比					-8	-20	-28	-7	-40	-43	-59	-40
北牟婁郡	卒業生数	115	110	112	121	93	75	94	79	68	79	70	62
	前年度対比		-5	2	9	-6	-18	19	-15	-11	11	-9	-8
	R4.3対比					-22	-46	-27	-42	-53	-42	-51	-59
小計	卒業生数	237	228	242	248	212	182	193	199	155	163	138	149
	前年度対比		-9	14	6	-8	-30	11	6	-44	8	-25	11
	R4.3対比					-28	-66	-55	-49	-93	-85	-110	-99
熊野市	卒業生数	132	113	117	119	109	96	101	104	104	123	98	98
	前年度対比		-19	4	2	9	-13	5	3	0	19	-25	0
	R4.3対比					-19	-23	-18	-15	-15	4	-21	-21
南牟婁郡	卒業生数	172	143	157	149	154	135	140	127	136	137	102	150
	前年度対比		-29	14	-8	-7	-19	5	-13	9	1	-35	48
	R4.3対比					12	-14	-9	-22	-13	-12	-47	1
小計	卒業生数	304	256	274	268	263	231	241	231	240	260	200	248
	前年度対比		-48	18	-6	-7	-32	10	-10	9	20	-60	48
	R4.3対比					-7	-37	-27	-37	-28	-8	-68	-20
東紀州合計	卒業生数	541	484	516	516	475	413	434	430	395	423	338	397
	前年度対比		-57	32	0	-6	-62	21	-4	-35	28	-85	59
	R4.3対比					-35	-103	-82	-86	-121	-93	-178	-119

《参考》

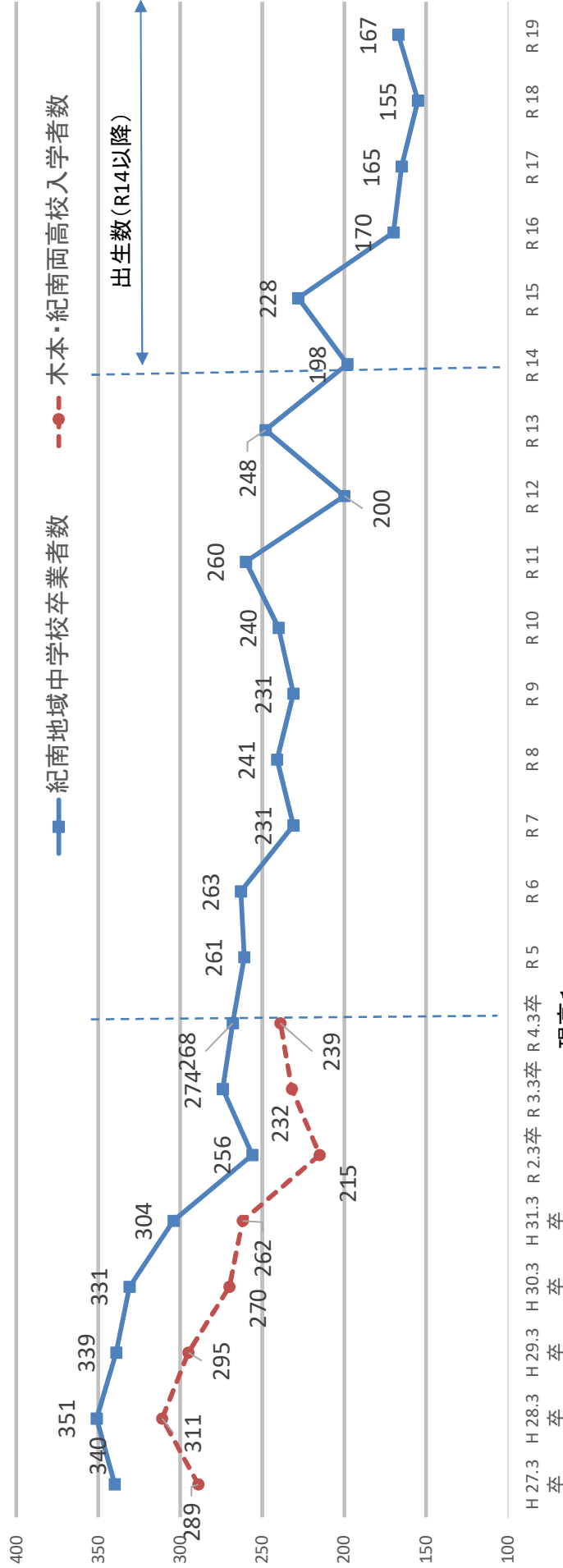
木本高校	募集定員	200	160	160	160
	欠員	0	2	0	1
紀南高校	募集定員	80	80	80	80
	欠員	18	23	8	0
学級数	木本・紀南	5・2	4・2	4・2	4・2

紀南地域の		R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度	R 9年度	R 10年度	R 11年度	R 12年度	R 13年度
入学定員の推移予測		6学級	6学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	6学級程度	4学級程度	5学級程度

# 熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数(予測)と木本・紀南両高等学校への入学者数

参考資料2 R4第2回協議会資料

※R14年度以降は地域の出生数を記載



## 熊野市・南牟婁郡の出生数

	H27年度出生 現小1	H28年度出生 5～6才	H29年度出生 4～5才	H30年度出生 3～4才	R元年度出生 2～3才	R2年度出生 1～2才	R3年度出生 0～1才
熊野市	99	73	108	60	87	82	68
御浜町	52	42	45	39	25	20	38
紀宝町	102	83	75	71	53	53	61
合計	253	198	228	170	165	155	167

1. 木本・紀南両高等学校への入学者人数は、熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数と比較すると、地域外へ進学する生徒や就職する生徒等が一定存在することから、毎年40人～50人少ない状況です。この状況のまま推移すると、両校への入学者数は令和7年度には5学級規模、令和12年度には4学級規模となるが見込まれます。
2. 令和7年度に両校への入学者数が5学級規模となった場合、中学校卒業予定者の進路選択をふまえると、令和7年度以降の当地域における県立高等学校のあり方について協議を進め、方向性を示していく必要があります。